

# 造形指導に不安を抱える保育者にとって有効な表現素材と 活用のあり方 ～保育者研修会のワークショップ事例を通して～

中島法晃

岐阜女子大学 文化創造学部

(2019年10月24日受理)

## Effective expression materials and practical use for nursery teachers who are worried about teaching modeling. — Through a workshop case for a nursery school workshop. —

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

NAKASHIMA Houkou

(Received October 24, 2019)

### 要 旨

本稿は、保育者が指導に関して抱える課題のひとつである絵画造形指導に対して、現場の保育者への研修「廃材を使用したごっこ遊び」を通して今後の指導への示唆となった点について記述した。幼児への絵画造形指導は、ただ上手に絵を描かせるということがねらいではないが、アンケートやその後のインタビューによると、保育者は自己の苦手意識に引っ張られ、「上手に描かせなければいけない。」と考えがちであり、それにより指導に対してさらに難しく捉えてしまう場合がある。本稿で取り上げる「廃材を使用したごっこ遊び」では、保育者が近似した保育歴ごとにグループとなり、廃材から衣装や建物などを制作し、実際に遊ぶというワークショップをおこなった。既成のものを組み合わせることに慣れている保育者が、廃材を用いて工夫し、さらにはグループ内の他の保育者のアイデアを取り入れ、ものづくりの楽しさを再発見することができたことで、幼児への今後の造形指導に対する示唆を得ることができたといえる。

キーワード：幼児美術、ごっこ遊び、表現指導法、教材、廃材利用

### 1 はじめに

保育者養成校において、幼児への絵画造形指導の教科は各機関によって様々な名称がつけ、開講されている。絵画や造形の基礎を学

修する「図画工作」や、「図画工作演習」等である。さらには、保育内容の「表現」、「造形指導法」、「幼児と造形」等では、絵画や造形の指導法を学修する。それらの講義または演習の単位を取得することで保育士または幼

稚園教諭になることができる。幼児の絵画や造形は、上手に絵を描かせることが目的ではない。発達に応じた手や体の動き、感覚を豊かにするということや、生活の中での様々な発見や感動をイメージすることなどが幼稚園教育要領等でねらいとして定められている。しかし、保育者養成課程を修了し現場で働く保育者の声からは、絵画造形指導に対する悩みや課題意識を抱えた言葉が多い。様々な園や施設、法人では各種研修会や勉強会等が開催され、現場の保育者が自己の課題を克服するための学び直す機会となっている。筆者においては、そういった研修会等で表現指導に関する講習やワークショップをおこなう機会が増えてきている。

そこで、本稿では、K子ども園にておこなった研修会を事例に挙げ、園で行った保育者へのアンケート調査に基づいて、幼児への造形指導に関して保育者が抱える課題を挙げる。さらに、保育者対象としたワークショップに基づいた表現指導の事例について記述する。そして、ワークショップ終了後の保育者のフィードバックから、本事例で取り上げた題材が今後の絵画造形指導にどのように生かされるかについての示唆を得ることを目的とする。

## 2 絵画造形表現指導に関する保育者の課題意識および先行研究

筆者は美術作家としてこれまで様々な幼稚園や保育園、子ども園等で非常勤講師として絵画および造形指導をおこなってきた。この指導には2つの側面があり、担任教諭または保育士がおこなう通常の保育での絵画指導を、より専門的な立場で指導するという側面と、教諭または保育士に対し、幼児への指導の仕方をアドバイスするという側面である。前者では、年齢に応じたのねらいを明確にも

ち指導することを念頭に置いている。後者の場合、保育者によって表現指導に対する課題が違うため、個別に対応しているが、授業後に幼児の絵を鑑賞しながらディスカッションをおこなう場合がある。園や施設によって指導に対する方針や指導法が定まっている場合が多いが、その中で個々の課題が散見している。

保育者らは、それぞれ保育者養成校を修了し教諭や保育士になるが、高橋(2001)は、「大学における保育者養成課程において、幼児の造形活動と造形表現に関する専門的な知識と技能を習得させることは不可欠である。しかし、保育者養成校の多くは、学生に十分な造形の指導ができていないのが現実であろう。」[高橋2001, p.21]と述べているように、十分な知識や技能を習得せずに現場で働く保育者が存在していると捉えることができる。現場で働く保育者は、保育者養成校にて学修したことを目前にいる幼児との関わりの中で学び直し、勉強会や研修会に参加し、それらを反芻しながら各自の指導方法を確立していくことが望ましいといえる。一方で、幼児美術教育に関する知識や技能に自信がある保育歴が長い保育者にとっても、表現指導は難しいという声を耳にする。

本稿では、保育士を対象におこなった研修会場であるKこども園に勤務する保育歴1年から27年までの保育士12名に対し造形指導に関する研修をおこなった。研修に伴いアンケート調査を実施したところ、表現指導における不安点として以下の回答が得られた。

氏名・保育歴	表現指導における不安点
KM・27年	・絵画について「指導」を入れるとは？ ・園内での作品展や園外の〇〇展に出品する作品となると、飾られる絵の出来栄が貼り出される。しかし、その子の思いや好き嫌いや考えと、描いたものを否定はしたくない。そこでいつも迷う。

GM・16年	・自分の考えや想いばかりになってしまいがちな ので、他の先生方の意見や考えを聞いたり相談し たりしないといけないと思っている。 ・絵の指導について、自由に描かせる中での指導 の仕方でも悩んでいる。
KH・15年	・つい保育士の思いを伝えがちになってしまうの が難しい。 ・個々で表現の仕方、思いが違うので、声かけ、 褒め方が自分の課題。 ・苦手意識のある子への声のかけ方なども毎回悩 む。
KW・14年	・自分が絵画造形に対し苦手意識が強いため、いつ も指導に自信がもてない。また、口を出さないよ うに思っている、つい・・・という時がある ので、「見守る」ことを大切にしたいと思ってい ます。
MH・14年	・苦手な子に対して、どう声をかけ、遊びに誘っ ていけば良いか悩む。
TT・13年	・人物を描くとき、腕や足はどこからでているの かということとどこまで教えて良いのか、またど う伝えたら良いのか難しい。
MK・10年	・自分自身が絵にコンプレックスがあるので、子 ども達が本当に楽しめているのかいつも不安に思 います。展示発表会用の絵の指導が苦手です。
MT・6年	・絵画が苦手な子に対して、いろいろな案は提示 するも、それでも描けない子がいる。造形が苦手 な子への指導の仕方がわからず悩むことがある。
YS・3年	・助言する時や一番最初に子どもたちに題材を提 供する時に、自身の中で技術などのレパートリー が少なく、良い方法やアイデアが思いつかないた め、勉強不足であり課題としています。
TM・1年	・ただテープで物と物をくっつけるだけの子には どのように目的を持ってもらうかを今の課題とし ている。
TN・1年	・どうしてもやりたくない子への進め方がわから ない。
KR・1年	・絵画活動が苦手な子に対して、どのように描け ば良いかなど一緒に話したりもするが、いざ描く となるとどう表現すれば良いかわからず、思うよ うに描けない子がいる。この場合、どのように援 助するべきか、どこまで声をかけて良いのかわか らない時がある。

(表1 表現指導における不安点についてのアンケートより抜粋)

12名中5名のアンケートには、「絵が苦手な子、やりたくない子への声のかけ方、援助の仕方(下線部)」について悩んでいるという記述があった。保育歴による差は見られず、保育歴が1年でも15年であっても、絵が苦手な子どもに対する指導に悩んでいることがわかる。その他の3名も保育歴の長さは関係なく、「自分自身が絵に苦手意識がある(網掛け部)」という理由で、表現指導に課題を持っている。残りの4名は、作品展に出品する作

品指導についての記述や、技術的な面における指導についての記述であった。保育歴27年のベテランといえる保育士であっても、作品展や展覧会に出品する絵を描かせるということに難しさを感じている。母の日や父の日の前後に、商業施設の一角で幼児の絵が展示されていることがある。幼稚園や保育園ごとに展示されているが、園によって実に見事なまでに似たような描き方や構図が多く見られ、どのような指導がなされているかを読み取ることができる。

筆者がこれまで関わってきた様々な幼稚園や保育園でも、作品展に飾られる絵は毎年同じようなものが多いといえる。育ちとねらいを明確にし、各園独自の指導法が確立されていると考えられるが、現場で幼児と関わる保育者にとっては、アンケート記述にあるように、「その子の思いや好き嫌いも考えると、描いたものを否定はしたくない。そこでいつも迷う。(KM)」という意見もある。これは幼稚園教育要領の保育内容表現領域のねらいである、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」ことを意識した記述であり、本来は「作品展用」の絵を描くことが目的ではない。それよりも幼児の中に萌芽した表現しようとする意欲を受け止めて、作品を通して幼児から発せられる言葉を聞き、対話を重ねていくことが望ましいといえる。

### 3 ワークショップ実践事例

～廃材を利用してごっこ遊びをしよう～

#### 3-1 ごっこあそび実践

前節では表現指導において保育者が抱える課題点を挙げた。幼児の表現意欲を増幅し、創造性を育むきっかけを与えるためには、保育者自身が表現を楽しむ、あるいは表現の本質を捉えなければならない。本実践では、子どもの表現活動の源泉ともいえる「ごっこ遊

び」を保育者同士でおこなうことにより、保育者が表現の基本に立ち返ることを目的とした。本項では、保育者が「ごっこ遊び」をおこなった実践に基づき共同制作活動が及ぼす効果について記述する。

会場は子ども園のホールを使用した。(写真1～写真6) ごっこ遊びをおこなうことから、グループ分けは同世代、または保育歴が近い保育者3～5名で組むこととした。本来ごっこ遊びは自然発生的に起こる遊びであるため、なるべく指示を少なくし、グループ内での話し合いの中から題材を決めることとした。会場のすべての壁側には多様な廃材を用意し、テープ類や画材類も豊富に用意した。グループに別れて話し合いをする中で、廃材を見て回ってどのようなものを作るかをイ

メージするグループがあったり、輪になって座り、じっくりと話し合うグループがあったりなど、進め方はグループによって様々であった。本実践では、制作におけるルールのひとつとして、素材に廃材を使用することを挙げた。当園では普段から多様な種類の廃材を収集しているという習慣があったことから、制作意欲が増す非常に充実した環境であるといえる。

廃材を生かした表現をするために、保育者らは制作したいものを決定した後に、様々な廃材の中でどのように組み合わせて制作するかということに重点を置いて話し合う様子が見えた。制作中の保育者らの会話の中に、「ごっこ遊びをするために、その道具を子どもに自分たちで制作させるという経験はな



(写真1) グループごとに分担して制作する



(写真2) 自然素材も豊富にストックしてある



(写真3) 廃材を使って工夫している



(写真4) 意見を出し合い制作している





(写真5) ごっこ遊び実演



(写真6) 受講者作品

かった。」という声があり、その理由は、「子ども達はあるものを何かに見立てて遊ぶことは多くても、組み合わせて新たなものを作り出すことができる子どもはあまりいない。」ということであった。保育者らにとっても、紙コップや紙皿を使って子どもにおもちゃ制作をさせることはあっても、廃材と廃材を組み合わせさせて制作させる経験がないと話す。

作品が完成した後、各グループで制作したものを使って実際にごっこ遊びを実演し、鑑賞することをおこなった。鑑賞後に他グループの保育者らに感想を話してもらったが、廃材の組み合わせについての意見が多かった。一方で、衣装をポリ袋で制作するグループが多く、それに対する反省の声もあった。様々な素材を用意する中で、廃材だけでなく保育現場で一般的に使われているカラーポリビニール袋を用意していた。本来はいつもあまり使用しない素材で制作することを目的としていたが、衣装を廃材のみで制作することを今後の課題として挙げていた。

### 3-2 保育者の感想レポートから

本項では、前項の実践後におこなったアンケート「ごっこ遊びワークショップの感想」の記述を元に分析する。

氏名・保育歴	ごっこ遊びワークショップの感想
KM・27年	・制作、劇ともにそれぞれの発想で、この場面には何があるか、考えながら行えた事で、充実した時間だった。廃材利用という点では、制作するのに簡単な材料で作ってしまったことが反省。
GM・16年	・子どもたちとのおまごとのごっこ遊びとはまた違うようなごっこ遊びができて楽しかった。廃材を使って小道具や衣装を作ることは今までも保育の中でしてきましたが、改めて他のグループの作品を見て、先生方の発想にすごいな、こんな表現の仕方もあるんだと勉強させてもらいました。
KH・15年	・自分がやってみて、日頃の子どもたちのなりきり方、入り込み方はすごいなと思い、子どもたちはやはりごっこ遊びのプロだなと思った。 ・ごっこ遊びを実際に行っていると、様々なそれぞれのアイデアが重なって独自のグループの空間ができてくるので面白い。 ・大人になってからは周囲の目や固定観念があるので、子ども達のやっているごっこ遊びに入ること、子ども達の世界観を知るの大切だなと思った。
KW・14年	・真剣にごっこ遊びをすることの面白さを知りました。子どもたちはいつもこんな気持ちで遊んでいるのだと気づいた。また、協力し合うことで廃材のいろいろな使い方を見ることができ、ごっこ遊びの発表では表現方法や先生方の知らない一面を見ることができました。
MH・14年	・始めはどうなるかと心配でしたが、色々話し合いながら作り上げていき、皆の前で演じることができ、とても楽しかった。他のグループのごっこ遊びもみられているような発見もあり良かった。
TT・13年	・自分が子どもになった気持ちでこういうことをしたら楽しいかな、わくわくするだろう・・・と考えながらでき、完成した時はとても嬉しかった。
MK・10年	・グループのメンバーと意見交換しながら制作活動に取り組むことができて楽しかった。夢中になるという経験から遠ざかっていたので本当に良い時間が過ごせた。
MT・6年	・3人での話し合いがまとまらず、作業に取り掛かるまでに時間がかかったり、構成を考えても役作りを決めるのに悩み難しかったところはあったが、全部自分たちで考えて作り上げていって最後は達成感もあり楽しく行えた。

YS・3年	・身につけるものがあると、より成り切ることができ、想像も膨らんでくると感じた。私たちのグループでは、舟を作ったのでそれに乗ってごっこ遊びをしました。一緒に乗ることで、親密に関わり、なんだか一体となって遊べたように思います。
TM・1年	・テーマが決まるまでに時間がかかったが、何をするか決めるとそこから内容や必要なものをそれぞれ出し合って、楽しくできた。子どものごっこ遊びでも同じようにアイデアを出し合ってやってみたいと思った。
TM・1年	・3人の夢や趣味に共通点がなかったのですがどういものになろうか悩みましたが、最終的にはまとまったものができたので、緊張はしましたが楽しかった。
KR・1年	・子どもの頃、ごっこ遊びが大好きだったので、大人になってからも役になりきってできたことがとても楽しかった。廃材を使って道具や町なども作ってみて、どうしても固定観念があり、作り方が同じだったりアイデアが偏ったりしてしまったので、今回の研修で他のグループの作品も見ることができ良い学びとなった。

(表2 ワークショップ後のレポートより抜粋)

本実践における感想で最も多かったのは、下線部にあるように、「他のグループの作品を見て、先生方の発想にすごいな、こんな表現の仕方もあるんだと勉強させてもらいました。(GM)」や、「協力し合うことで廃材のいろいろな使い方を見ることができまし、ごっこ遊びの発表では表現方法や先生方の知らない一面を見ることができました。(KW)」,「廃材を使って道具や町なども作ってみて、どうしても固定観念があり、作り方が同じだったりアイデアが偏ったりしてしまったので、今回の研修で他のグループの作品も見ることができ良い学びとなった。(KR)」など、保育者同士の表現に関する交流が学びとなったという記述であった。

保育所および幼稚園において、担任が1名、副担任1~2名体制で一つのクラスを担当するという施設が一般的であると考えられるが、絵画造形指導は基本的に担任に一任されている場合が多い。副担任と共同で子どもの表現指導をおこなっているが、現場においてはどうしても個別に子どもへ対応する時間が多く、細かな指導やフィードバックが十分に

行われているとは言い難い。本実践において、保育者同士の表現に対する考えや特性等を共有しあえたことは今後の保育における指導の助けになるであろうと考えられる。

### 3-3 日常での保育への示唆

前項では、保育者同士の共同制作により、普段担任として独自の指導法に限界を感じている保育者同士が表現を通してそれぞれの制作法やアイデアを参考にすることで、自己の制作に取り入れることができるという相乗効果があるということが明らかになった。本項では、それを踏まえて、本体験が日常の保育にどのように生かされるであろうかというアンケート記述をまとめる。

氏名・保育歴	日常の保育への示唆
KM・27年	・自分たちで作り上げるごっこという点で、発表会活動に取り入れられる。子ども達が出来る部分をもう少し増やしていく必要がある。 ・日々の自由な時間に廃材を利用して好きな者をどんな作っていく事が必要。その時間の確保が課題。
GM・16年	・子どもたちに普段から廃材に触れさせたり自由に作れる環境をまずは作ってあげたいと思いました。作ったもので遊び込んでいる姿から、子どもの新しい一面を発見していけると感じた。
KH・15年	・様々な廃材を使用することで、何にでも見立てていける楽しさ。それを使って自分たちの世界を作り上げていける。友達とアイデアを出したり、友達のやっていることから繋げて広げていける面白さを子どもたちに知らせていきたい。 ・これからの発表会の劇も今回のように進めていけたら良いなと思った。
KW・14年	・遊びの中で何かが必要になった時、廃材を利用すれば代用できるし、作ることもそれを使って遊ぶことも2倍楽しむことができると思いました。好きな時にイメージしたものを作れるような環境も考えたいと思いました。
MH・14年	・子どもの目線になり、一緒に楽しんでいけるように考えていきたい。考えの柔軟さが大切だと改めて思い、子供達の発見や言葉もひとつひとつ注目していきたい。
TT・13年	・子どもの想像したこと、空想したことなどに、こちらもおもしろいね」と気持ちを共感してあげられるようになってしまった。また、思い通りにやってみよう！とチャレンジすることを応援したいと思った。

MK・10年	・子どもからの要望に応えることができるアイテムが一つ増えた。 ・自分が発表する時、恥ずかしかった気持ちがあったが、子どもも同じ、またはそれ以上なのだろうなと思った。子どもの気持ちに寄り添えると思う。
MT・6年	・実際に子どもたちがみたことによって普段廃材を使っている子どもたちには良いアイデアがたくさんあったと思うので、廃材遊びの時に思い出してヒントにしながら作るのも良いと思った。
YS・3年	・廃材の可能性について、様々な点から知ることができました。一緒に廃材遊びをした時に、子どもたちのアイデアも聞きながらものづくりを楽しみたいと思いました。ごっこ遊びをする時に、こちらが用意したもので遊ぶだけでなく、今回自分たちで作って自分たちで遊ぶという経験させていただき、とても充実して、達成感もあり楽しかったので、子ども達が作ってそれをごっこ遊びにつなげるということも動めていきたい。
TM・1年	・こんなことをしてみたい、という子どもの言葉を拾って、そのためには何が必要か、どうするかを話しながら決め、子どもも主体で作品づくりや遊びが広がると思う。
TM・1年	・廃材でいろいろなものができるとわかったので、廃材で子どもの想像力を生かして作れる機会を作っていきたいと思いました。
KR・1年	・まだ作ることはできていないが、子どもたちの発想は私たち大人からは出ない、とても驚かされることばかりなので、自由遊びの時にまずはこちらからやってみようと思った。また、廃材を使った楽器づくりをしてみんなで合奏したいと思っている。

(表3 アンケート「ごっこ遊び体験が通常保育にどう生かされるか」より抜粋)

#### 4 おわりに

本実践において、同じ子ども園に勤務する保育者同士が「ごっこ遊びをする」という共同制作をおこなった。普段の保育では保育者は担任として自分のクラスの幼児の成長発達に積極的に関与し責任ある保育をしているが、一方で絵画および造形指導における不安や葛藤などを抱えている保育者が一定数存在することが明らかになった。本実践を通して、

保育者同士がグループに分かれてそれぞれが話し合って1つのごっこ遊びをおこなうまでのプロセスを協働した。グループ内でイメージを言葉で共有し合う姿がある一方で、言葉ではうまく説明できないことを造形行為によって伝え合い、共同で制作することを通して各自のイメージを伝え合う姿があった。さらに、本実践では多様な廃材を利用しておこなったことで、造形素材としての廃材の可能性について、アイデアの多様性を共有し合うきっかけになったという効果を得た。

また、本稿では保育者の絵画造形指導に対する課題と解決に向けた指導法を考察することを目的としている。「ごっこ遊び」は本来子どもの自発的な遊びであるが、「廃材を使用した造形あそびを題材にした『ごっこ遊び』」という教材が提案できるのではないであろうか。次稿の課題とする。

#### 引用・参考文献

- ・菊池紫乃、内田伸子（2012）『子ども中心の保育—子どもの主体性を大切にする援助—』江戸川大学教職課程センター紀要1 pp.8-15
- ・高橋敏之（2001）『保育者の専門性としての造形理解と幼年造形教育学の構築』保育学研究39(1) pp.20-27
- ・林健、福田隆真（2006）『児童の創造性を高める図工教育についての一考察』山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要21 pp.161-172
- ・文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館